



CURRICULUM 01

縦断型プログラム

学年を超えて継続して学び、医師・医学者としての資質を高める。

医学基盤プログラム

医学基盤プログラムは、縦断型プログラムの中心的な役割を担っており、6年間を通して、医師となるための心構えや、基本的な知識・技術を身につけてもらいます。主な科目は、医学概論、医学統合プログラム(SGLを含む)、医学実地演習(Early Clinical Exposure)、基礎科学特別講義、克己殉公・人文社会科学、医事法学、医療福祉論・医療倫理学、症候学・臨床医学概論、国際保健、医学工学、救急医学、形成・再建・再生・移植、医療の質と安全、リハビリテーション、基本臨床実習、臨床実習総括などで構成されています。

科学的探究

医学部教育では、医師国家試験合格を一つの目標とするだけでなく、学問としての医学に興味を持ち、卒業後の医学研究への動機づけや意欲を養うことが重要です。また、医師には、医学の進歩に関心を持ち、科学的探究心を維持し、最新の知識と技術を修得する努力が求められます。そこで、本学の教育理念「愛と研究心を有する質の高い医師と医学者の育成」の実現に向けた実践プログラムとして「科学的探究」を実施します。

- ◎学生が主体となり、興味を持つ研究テーマを自由に選択します。学内外の研究室に一定期間所属し、研究に参加することで医学研究の基礎を学びます。
- ◎一連の研究体験を通じて、論理的・批判的思考、課題解決能力を養い、「愛と研究心を有する質の高い医師と医学者」に必須の資質を育成します。

行動科学

本講義では、医師になるために必須の知識・教養である行動科学(心理学)を扱います。行動科学は人間の心理、行動を科学的に研究する学問分野です。

この講義では、感覚・知覚、認知、学習、発達、感情、社会などの心理学諸領域を中心に実験、観察、検査などの心理学的方法論に基づいて蓄積された心理学の基本的な成果を学び、これらの知見を通して人

間理解を深めることを目標としています。医師として、患者の理解に必要と考えられる心理学的な知識を修得し、1年次から3年次まで学んできた行動科学の内容を再確認した上で、人間の行動や心理の理解を深めるとともに、文化的社会的文脈のなかで人の心と社会の仕組みを理解するための基礎的な知識と考え方とリベラルアーツを学びます。

医療情報科学・データサイエンス

人工知能の医学・医療分野への応用という観点から、統計学やコンピュータリテラシー、情報プライバシーの概念、人工知能の基本的な考え方、人工知能の最新の活用例、Pythonによるプログラミングなどについて学びます。

外国語教育

国際的に活躍できる医療従事者・医学研究者となることを目標とし、そのために必要な英語技能を修得します。併せて、国際的な交流において求められるコミュニケーション技能を高めるとともに異文化への理解を深めます。この目標を達成させるために、1年次から4年次まで「英語I」「英語II」「英語III」「英語IV」が各年次に配当されています。

社会医学

社会医学とは、医療機関を受診した患者に対する診療行為である臨床医学に見合う形で、医療を社会的側面から理解するための専門分野です。保健・医療・福祉を三位一体として理解すれば、関連情報を適切に理解できます。

本学における社会医学の一分野である「衛生学公衆衛生学」は、健康とは何かをまず理解するところから始まり、様々な疾病(感染症・生活習慣病・精神疾患など)の予防対策、健康の保持・増進活動、医の倫理、保健・医療・福祉情報管理やプライバシー保護、医療安全対策などを学ぶこととなります。

主要科目紹介

外国語教育

少人数クラスの授業で、国際的なコミュニケーションに対応できる実践的英語力を身につける

POINT

少人数クラスの授業で実践的な技能を修得



担当教員 Kirk Steven 教授

1990年米国Massachusetts Institute of Technology言語学部哲学卒業。2002年米国University of Washington修士(英語教授法)取得、2016年英国University of Nottinghamにて博士(応用言語学)取得。2012年東京大学教養学部特任講師、2017年日本医科大学外国語准教授を経て2023年日本医科大学外国語教授。

国際的なコミュニケーションの場面に対応できる医師・医学研究者・医療従事者となるために、国際社会及び異文化に関する幅広い見識を身につけ、多様な状況に即した実践的な言語技能の修得を目指します。1年生から4年生までReading、Writing、Listening、Speakingのそれぞれの実践的スキルを訓練しながら、総合的な英語運用能力を高められるようカリキュラムを編成しています。

授業は主として英語で行われ、レベル分けテストをもとに1クラス15～30名前後のクラスで実施されます。特にListening/Speakingのための授業は、約15名の少人数クラスで行われ、学生間で活発に発言がなされる機会となっています。他にも、英語でのアカデミックライティングやプレゼンテーション技術、語源を視野に入れた医学用語、英語で研究論文の執筆方法、等を学ぶ授業を開講しています。また、継続的なリーディング指導や、医師と患者間の医療面接に関わる実践的な英語指導なども行います。

医学基盤プログラム(医学統合プログラム1)

医学生、さらに医師になってからも、医学を学ぶ上で、能動的に学び続ける姿勢が必要です。医学基盤プログラムは縦断型プログラムの根幹となるものですが、そのなかの「医学統合プログラム1」では、そのような姿勢を最初に学ぶ機会となります。

この科目では、小グループでのチュートリアル形式で、学生自らが学修すべき項目を抽出し、それらを自ら調査・理解し、さらにグループ内で討論しながら知識を獲得する「問題基盤型学習」による学び方をしっかりと身につけます。通常の講義とは違い、自ら計画して調べ、知識を得る学修法を通して、より深い理解が得られることを体得してもらいます。

POINT

能動的に学ぶ姿勢を身につける

科学的探究

医師には生涯にわたり医学の進歩に関心を持ち、最新の知識と技術を修得する努力が求められます。そのためには、卒業後は自分自身で問題解決を行い、学習を継続する能力が必要です。3年次に行われる「科学的探究」では、基礎科学・基礎医学・臨床医学の研究室や、連携大学の理工学系研究室に配属され、8週間(旧カリキュラムでは3週間)にわたって実際の研究に携わります。これにより、未解決の課題を論理的、批判的思考をもって解決する能力を養います。

また研究を通じて、生命現象や病態を理論的に考察する態度を身につけ、医学研究への意欲を高め、国際レベルで活躍し、将来の日本医科大学を担うような人材を育成します。



STUDENTS VOICE



早期に臨床現場を経験して、意識の変化を実感しました

医学部 医学科2年 船戸萌衣

縦断型学習プログラムで一番印象に残っているのは、1年次の「医学実地演習1」です。術衣を着て間近で手術を見学したこと、看護業務を学んだこと、また多職種が連携して成り立つ病院の機能を、医師以外の幅広い視点から知ることができました。

初めて患者さんと接するという経験もしました。患者さんが実習生である私にかけてくださった言葉や、その手が温かかったことは、ずっと忘れることはないと思います。医師は病気を治すだけでなく、病気と向き合う患者さんの不安や苦しみを理解することに力を注ぐ大切さを学びました。まだ医学的知識を持たない早い時期に、実際の医療現場での実習に臨んだ経験は貴重であり、自分の目で見ることでしか知り得ない学びと意識の変化があったことを実感しています。

メッセージ動画
HPで公開中!

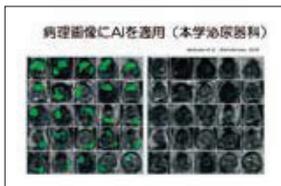
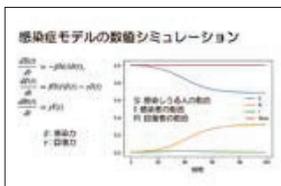
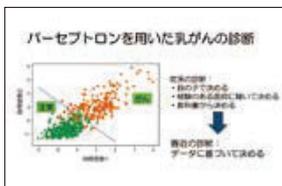


人工知能概論

数理・データサイエンス・AI教育センターに属する教員が1年生に対してAIリテラシー教育を行います。2023年度の内容としては以下になります。

前半は座学によるAIに関する基本的な内容の講義を行い(臨床医による医療現場での実際のAI活用の講義を含みます)、後半はコンピュータを用いてPythonのプログラミングの実習を行います。

実習の課題としては医学的なデータの解析が中心となります。実習に関してはティーチングアシスタントによる個別の指導が行われ、コンピュータの操作に不慣れな学生にも対応できるようになっています。この授業を踏まえて、2年次、3年次にもデータサイエンスに関する進んだ授業を提供します。また3年次の科学的探究という授業では、連携している早稲田大学や東京理科大学においてより深くAIについて学ぶことも可能です。



●臨床医によるAI講義

本学におけるAIリテラシー教育の特色は、臨床医によるAIに関する講義が含まれるということです。2023年度は救急医学、放射線医学、泌尿器科学の講師が講義を行いました。

《AIと救急医療》



COVID-19の患者の振り分けや、ECMOなどの取り外しの判定にどのように機械学習を使うかというところについて理解します。

◀救急医学 五十嵐 豊 講師

《画像診断におけるAI活用》



企業との共同研究による医療画像AIの開発(放射線によるブラーをどのように取り除くか)と、その医療器具としての様々な問題点について紹介します。

◀放射線医学 町田 幹 講師

《医療における様々なAI化》



前立腺がんの大量のデータの取得に関すること、説明可能なAI、マルチモーダルなAIの利用、ロボット医療などについて学びます。

◀泌尿器科学 赤塚 純 准教授

STUDENTS VOICE



AIとの協働が医療の質を高くすることを学びました

医学部 医学科2年 岡野 穂佳

1年次の人工知能概論の授業では、AIの基本的な知識から始まり、ウイルスや生体分子の研究、画像診断、救急医療などの医学的なトピック、芸術分野へのAIの応用まで、多岐にわたる内容を学ぶことができます。

私自身、最初は「AIは工学の領域」という先入観を持っていて、医学生がAIを学ぶ意義を疑問に思っていました。しかし、自分が医師になるときは、AIと協働できるかどうかは医療の質に大きな影響を与える時代が来ること、医師を目指す者としてAIについて学ぶ責任があることを理解するきっかけとなりました。Chat GPTやPythonを使用した実習を通じて、AIの思考プロセスに触れ、「AIの思考法」を学び、AIの限界をより本質的に理解することができました。これらの学びが、将来的にAIを適切かつ効果的に活用するためのヒントとなりそうです。

メッセージ動画
HPで公開中!



STUDENTS VOICE



SGL(現:医学統合プログラム)で自主的に学ぶ姿勢と、体系的に考える力がつきました

医学部 医学科3年 近澤 志帆

少人数でグループ学習を行うSGL(現:医学統合プログラム)は、私の「学ぶ姿勢」を変えた授業です。与えられたテーマをもとに何を学ぶべきか調べ、各自が課題を持ち帰って調査を行い、ディスカッションを重ねて成果を発表します。この授業をとって膨大な情報の中から重要な情報を取捨選択したり、相手に調査内容をわかりやすく伝えたりする力が身につきました。

同じグループの学生の姿勢にも刺激を受けました。自ら学修すべき点を抽出して、調査・考察をするために、今までの講義や実習で学んできたことを結び付けながら体系的に考える力もつきました。これにより、臨床現場での実習の際にも、講義での知識を生かして学習をするようにしています。自主的な学びの姿勢をさらに発展させ、日進月歩の医療に対して生涯真摯に学び続ける医師をめざしたいです。